

吉田 満（よしだ・みつる）

1、プロフィール

小説家。作品「戦艦大和の最期」は、沖縄突入作戦に参加する大和の戦闘経過を作者の体験に基づいて叙述。カタ仮名まじり・文語文体のひびきは鮮烈で日本戦争文学の傑作。

<生没>

1923(大正 12)年1月6日～1979(昭和 54)年9月 17 日

<代表作>

「戦艦大和の最期」「臼淵大尉の場合」「祖国と敵国の間』『提督伊藤整一の生涯』『青森讃歌』

<青森との関わり>

日本銀行青森支店長。昭和 40 年 10 月から昭和 43 年本店監査役に転任するまで青森市に住む。

2、作家解説

小説家。大正 12(1923)年東京生まれ。府立東京高等学校より昭和 17 年東京帝国大学法学部法律学科へ進む。在学中「学徒出陣」で海軍に入団、第4期予備学生となる。19年9月大学繰り上げ卒業。12月海軍少尉に任官。20年4月、副電測士(レーダー)として戦艦大和に乗り組み、沖縄突入作戦に従軍、奇跡の生還を果たす。

復員後、吉川英治の励ましをえて「戦艦大和の最期」の草稿を一日で書きあげる。小林秀雄の推輓で雑誌「創元」に発表の機をえたが、連合軍司令部(GHQ)の検閲にあい全文削除の憂き目にあう。今日みる形の初版が創元社より刊行されたのは、講和条約発効後の 27 年である。自らの反省も含めて、戦争の生々しい体験をありのままに描いた作品の評価は高い。「その鮮烈な文語文体、直裁無類の戦闘情景の描写によって多くの読者の心を圧倒した。――すぐれた戦記物

に見るような簡潔雄渾な文章で、凄惨な艦上戦闘をこれほど迫真的に描き出したものを私は他に知らない」、橋川文三の評である。

復員後、日本銀行に入行。金融人としての生活に入り、作家として長い沈黙が続く。その間、この作品は『昭和戦争文学全集』(昭和 39 集英社)『戦争の文学』(昭和 40 京都書房)『戦争文学全集』(昭和 49 毎日新聞社)等に所収され、各種文庫で発行され続けている。そして決定稿が北洋社から刊行されるのが昭和 49 年7月である。

3、資料紹介

○『戦艦大和の最期』

図書

1952(昭和 27)年8月 30 日

182 mm × 130 mm

作者の壮絶な体験を草したこの作品は、はじめ雑誌「創元」に発表される予定であった。が、占領軍の検閲にかかり初版が創元社から刊行されたのは講和成立後の昭和 27 年である。戦闘経過を文語体カタカナまじりで鮮烈に表現、昭和戦記文学に不滅の異彩を放つ。